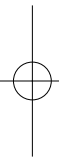


# カウンターカルチャーとは何だったのか？ What Was Counterculture? カルチュラル・スタディーズの 初期研究の検討をつうじて Focusing on an Initial Study of Cultural Studies

桑野弘隆  
KUWANO Hiroataka

## はじめに カウンターカルチャーと反システム闘争



本論は、カウンターカルチャーの歴史的な意味に迫ることを目的とする。サブカルチャーのなかでも、カウンターカルチャーはある特異性をもった社会現象に思われる。この特異性の解明には、カウンターカルチャーの出現を準備した1950-60年代のサブカルチャーおよび政治経済状況を分析する必要がある。そのさい、カルチュラル・スタディーズによるサブカルチャーおよびカウンターカルチャーをめぐる研究が有益な参照項になるように思われる。本論では、カルチュラル・スタディーズの古典ともいえる『諸儀礼を通じての抵抗』(*Resistance through Rituals*)に収められた、ジョン・クラーク、スチュアート・ホール、トニー・ジェファースン、ブライアン・ロバートによる共同研究「諸サブカルチャー、諸文化そして階級」(以下、「諸サブカルチャー」と略す)を検討し、その分析の今日的有効性と限界を見極めることにしたい。

「諸サブカルチャー」によるカウンターカルチャー分析の特徴として、カウンターカルチャーを“milieu”(60)と捉えている点が挙げられよう。<sup>1</sup>「諸サブカルチャー」は、カウンターカルチャーを単なる文化的ムーヴメントを越えるものとして捉えている。すなわち、カウンターカルチャーは、文化的な運動のみならず政治的かつ経済的な運動としても分析されている。この視圏を切り開いたゆえに、「諸サブカルチャー」はカウンターカルチャー

研究における必要不可欠な参照項となっているのである。さらに、理論的な展開が十分にはなされていないにせよ、カウンターカルチャーが近代的諸価値、近代的枠組みにたいする転覆的な抵抗だったという認識を「諸サブカルチャー」に読み込むことも可能である。

もちろん現在の視点から見れば、カウンターカルチャー分析はより広い歴史的文脈において考察されなければならないことははっきりしている。なぜならば「諸サブカルチャー」が分析の対象に据えたような現象は、英国と合衆国にとどまらず少なくとも帝国主義諸国において同時多発的・共振的なものとして現れたからである。「諸サブカルチャー」の限界を指摘するならば、「諸サブカルチャー」は、それが名指した“milieu”の歴史的な意味を十全に解明することができなかったという点が挙げられよう。では、それが名指したカウンターカルチャーの“milieu”とは何だったのか。

それを探るためには、カウンターカルチャーを、ニューレフト、マイノリティの抵抗運動、現代思想などと節合された近代世界システムにたいする反システム運動というコンテクストに位置づける必要がある。ここで「反システム運動」というようなタームが導入されなければならないのは、それによって分析されるべき現象が既存の諸運動とは明らかに一線を画していたからである。1960年代、抵抗と闘争の歴史に一つの画期が刻まれたことは否定できない。それは権利闘争・条件闘争から反システム闘争へのパラダイムチェンジという他ないものであった。異議申し立て、抵抗、蜂起はいつでも起こってきた。ところが、1960年代に入るまでは、それらは近代的な諸価値、制度、境界、差異を前提にしたうえで、その「内部」における権利闘争・条件闘争という側面が強かったといわねばならない。それは国境、人種、階級、家父長制、性差などは前提にしたうえで、その枠内での差別の軽減、政治的権利の獲得、経済的保障などを追求したのである。それらの追求は「近代化」という観念でもって希望をもって語られもした。

第二次大戦後から約20年間持続した世界的経済成長は、帝国主義諸国にたいして階級対立の解消は間近だという印象を与え、市民権運動の興隆はすべての国民に政治的・経済的利益を保障するものにも思われた。他方で、ウォーラーステインが指摘したように西側ではウィルソン主義、東

側ではレーニン主義が唱えられ、植民地地域には民族自決と国民的発展 (national development) という青写真が与えられたのだった——しかし、それはやがて絵に描いた餅であったことが判明するのだが。近代化は、すべての国家そしてすべての個人がその成果を享受しうる過程と映っていた (Wallerstein, 1995b)。しかしながら、1960年代に生起した抵抗や蜂起は、近代化というフレームワークそのものに向けられていたとあってよい。諸個人の庇護者と考えられ、すべての闘争がそれらをめぐる条件闘争であるかのように受け入れられていた国民国家、党、労働組合、学校、家族、性的アイデンティティなどは、その自明性を剥奪されただけでなく、それじたい転覆されるべき対象として現れた。支配政党と反対政党、経営と労働の対立は疑わしいものとなり、同一システムにおける相互補完的な担い手どうしであることが露呈された。さらには学校や家族までもが諸個人への桎梏として見なされはじめた。少なくとも資本制社会における家族や学校の機能が真剣な議論の対象となった。それは、差別、抑圧そして搾取への個別的な抵抗のみならず、それらを産み出しているシステムそのものに対するトータルかつ転覆的な抵抗が現れたことを意味する。たとえば、絳秀実の労作、『革命的な、あまりに革命的な』は、現代思想、ニューレフト、マイノリティによる反差別闘争そしてカウンターカルチャーが、複雑多岐に渡る相互作用のもと、理論、政治、芸術の各領域において共振的かつ革新的なパラダイムを打ち立てたことを論証している (絳、6-27)。反システム運動は、必然的に領域横断的かつ複相的な運動であるはずのものである。こうしてカウンターカルチャーは、真・善・美という近代的枠組みをも越えつつ他の社会運動と節合されることによって、資本と資本主義国家にたいする転覆的な政治性という位相を併せ持つことになった。

さらに反システム運動は資本と資本主義国家にたいするグローバルな射程をもった蜂起にまで突き進んだ。たとえば、『反システム諸運動』 (Antisystemic Movements) と題された共同研究のなかでウォーラステインは「世界革命は、これまで二度あっただけである。一度は1848年に起こっている。二度目は1968年である」 (Arrighi, Hopkins and Wallerstein, 79) と述べている。グローバルな共振性を見せた「1968年世界革命」を顧みれ

ば、日本における10月21日「国際反戦デー闘争」は、学園占拠闘争が労働運動・反戦運動と連帯するかたちで地区占拠闘争に発展した事件であった——しかし学生運動はその後孤立自閉してしまうのだが。イタリアのアウトノミア運動は、労働者による工場占拠闘争・自主管理運動をつうじて資本制生産諸関係の革命にまで届くかに見えた。フランスの「五月革命」では労働者の大規模ストライキが学生反乱とすんでのところで出会い損ねた——だが、合衆国ではベトナム反戦運動と黒人公民権運動の出会いがあった。

さらに1968年世界革命の歴史的な意味は、グローバルに共振する運動の出現を可能にしたことにとどまらず、その「敵」を同時に名指したことにもある。すなわち、近代世界システムとしての資本主義の存在が実践的にも理論的にも確証されたのである。それは思想史においては、資本主義の世界性の（再）発見というべき出来事であった。従来のマルクス主義理論によって認識された資本主義と階級闘争は、「国民性」という枠組みのなかで認識されていた。たとえば、カール・マルクスは、ポリティカルエコノミーと呼ばれる国家の富を増大させる学の批判の後継者と見なされてきたし、独創的なマルクス経済学を打ち立てた宇野弘蔵もまた、『資本論』を一社会の経済モデル——純粋資本主義社会——として理論的に再構成している。こうして世界経済は諸国民経済の総和として捉えられ、帝国主義は国民経済（＝土台）における危機に規定された国家（＝上部構造）の対外戦略だと説明された。さらに、実践的戦略としてもトロツキーの世界革命論は弾圧されスターリンの一国社会主義が国際共産主義運動の綱領の地位をえたのだった。

ところが1960年を境にして、資本主義の世界性の（再）発見が行われる。まず挙げるべきは1950年代後半から1960年代にいたる岩田弘の業績であろう。岩田弘は宇野派マルクス経済学から出発したが、宇野理論への批判を通じて「世界資本主義」論を体系化した。岩田は、国民経済を世界資本主義の有機的部分として捉えるべきだと主張したのである。つづいて、ウォーラーステインは、歴史的世界システムとして資本主義を捉える視点を提出した。さらにウォーラーステインを特異にしているのは、資本

主義を専ら経済的システムとして捉える視点を批判しているところである。ウォーラステインによれば、資本主義はその端緒（「ながい16世紀」）から、彼がインターステーツ・システムという呼ぶ国際的な政治・支配システムと不可分であった。さらに、最近のウォーラステインは、資本主義の文化・イデオロギー的側面を強調している。ウォーラステインは資本主義をその複相性において、すなわち政治的・経済的・文化（イデオロギー）的システムとして捉えているのである。

「諸サブカルチャー」にアクチュアリティを読み込もうとするならば、同時代とも言える岩田弘やウォーラステインによる諸テキストと節合してみる必要がある。そのとき、「諸サブカルチャー」が名指した“milieu”とは、資本主義という世界性と複相性を特徴とする近代世界システムにたいするグローバルな共振性を見せた蜂起の場であり、その蜂起に続いて創造され、打ち立てられた資本と資本主義国家にたいする政治的・経済的・文化的なオルタナティヴであったことが見えてくるはずである。近代世界システムへの抵抗運動が主体化の過程を進んだのと並行して、理論は世界資本主義の解明へと向かっていたのである。カウンターカルチャーをこのような歴史的なうねりの一潮流として位置づける必要がある。カウンターカルチャーは、単なる「文化現象」にとどまるものではなく、世界革命の一翼を担っていた。そしてこの世界革命は、抵抗と蜂起がもはやナショナルないしインターナショナルな枠にとどまってはならぬこと、大衆のトランスナショナルな連帯に基づかなければならないことを示すものであった——そして蜂起に続いて、新たな政治形態、新たな生産様式、そして新たな文化が同時並行的に発見、創造されねばならないことも。

そこで本論はつぎのような論証手続きをとる。1章では、カウンターカルチャーの背景に迫るため「1968年世界革命」を用意した諸理論を検討する。「諸サブカルチャー」が見出した“milieu”は近代世界システムへのオルタナティヴであるが、その歴史的な意味を知るためには資本主義の世界性ならびに複相性への認識が要請されるからである。つぎに、「諸サブカルチャー」の理論的貢献を検討する（2章）。その貢献の一つとして、グラムシのヘゲモニー理論、アルチュセール派イデオロギー理論を批判的に継承

することによって文化概念を刷新したことが挙げられる。さらに、「諸サブカルチャー」が重視したサブカルチャーからカウンターカルチャーへの移行過程を、現在の政治学・経済学の研究水準を踏まえて再検討することにする。そのうえで、カウンターカルチャーの歴史的な意味を明らかにしたい。最後にカウンターカルチャーの「その後」についても触れる必要があるだろう。グローバルな共振性を見せた反システム闘争は、しかしながら近代世界システムを揚棄するにはいたらなかったと今のところ言わなければならない。それどころか「1968年革命」は、忌まわしい記憶を人々に刻み込んだ挫折として語られることも多い。事実として、われわれは今なお抜け出せない長い反革命の時代に入った。カウンターカルチャーの歴史的な意義をどう位置づけるべきか、それはわれわれの行く末をどう考えるかに関わる問題でもある。

## 1. 資本主義の世界性および複相性の発見

カウンターカルチャーを理解するためには、その運動が揚棄しようとした当の対象を理解しなければならない。その対象を端的に表現すれば、「近代世界システム」であると言えよう。そして思想史を検討するならば、カウンターカルチャーがその一翼を担ったグローバルな反システム運動に並行するかたちで、近代世界システムを解明しようとする理論的動向を確認することができる。この動向の特徴としてまず挙げられるのは、資本主義を国民経済からはじめて思考すること——すなわち一社会モデルを通じて資本主義を観念すること——を批判し、資本主義の世界性を主張している点である。かわりに各国民経済は世界資本主義のなかの有機的な部分として捉えられるわけである。第二に重要な点は、資本主義を経済システムに還元してしまわず、政治的かつ経済的そして文化的でもある複相的システムとして捉えている点である。

ここでは、岩田弘とウォーラステインの理論を中心に取りあげるが、彼らは史的唯物論が描き出した「土台と上部構造」という哲学的比喩がもはや有効ではなくなる地点まで、資本主義概念を練り上げている。資本主

義は、世界市場、すべての主権国家がそのなかに位置づけられる国家間のハイアラーキー・システム、そして両者の再生産を保障するイデオロギーからなる重層的節合体として認識されている。なるほど、資本の蓄積を目的とする価値増殖運動体としての資本、翻って暴力によって作動し、暴力の蓄積を自己目的とする国家装置とはそれぞれ異質な論理でもって動くものである。しかし、資本主義における両者の節合——その中心には労働力商品と消費主体の包摂がある——は、単独では不可能であったはずの世界史の担い手を産み出したのである。

岩田弘は、資本主義の原理的な解明が一国経済モデル（宇野「純粹」資本主義論）にしたがっては無理であること、資本主義はその端緒（重商主義的段階＝商人資本）からつねにすでに世界性をもっていたこと、グローバルな金融システム・分業体制が成立していたことを論証した（岩田、1964、7-66）。岩田は、各国経済の自立性を過大評価するべきではない、と述べている。なぜなら、岩田によれば「資本主義が、世界市場的総括体をなす世界資本主義としてのみ実在するとすれば、各国の資本主義経済は、そうした世界資本主義の特殊的構成部分をなすものとしてのいわゆる国民経済でしかありえない」（岩田、1989、187）からである。

イマニュエル・ウォーラーステインによれば、当の資本主義諸国家もその「主権」という近代的概念とは裏腹に、インターステーツ・システムと呼ばれる、ハイアラーキーかつネットワーク的な権力システムのなかに取り込まれている。「全ての国家が単一の権力のハイアラーキーに位置づけられている」（Wallerstein, 1995a, 70）。このグローバルな権力構造は、グローバルに繰り広げられている搾取と取奪を維持・管理し、資本蓄積を脅かす抵抗・蜂起を押さえ込む治安維持を担う。諸国家の内外諸政策は、この階層的構造においてそれぞれが占める位置によって限界づけられている。そしてインターステーツ・システムにおける支配上層部は、ポスト近代的なシステムである〈帝国〉における貴族制という審級に移行するかもしれない（Hardt and Negri, 304-324）。

資本主義国家は、法的諸関係、徴税システムそして市場管理技術を練り上げることによって、資本制経済を促進してきた。ところで、労働力の商

品化というマイクロなレベルに目を移すならば、その再生産を担っている国家のイデオロギー諸装置 (appareils idéologiques d'Etat 以下 AIE と略) を発見したのはルイ・アルチュセールである。つまり、資本と国家は「文化領域」の組織化にも介入している。AIE のもとでは、アルチュセールがイデオロギーと呼び、ミシェル・フーコーがディシプリーヌ (discipline) と呼んだところのマイクロな権力が作動している (Foucault, 146-155)。この権力は、身体に作用し、生産諸関係において占める役割にふさわしい規範、コード、ルーティーン、儀礼などを「自発的に」生きるべく諸個人を主体へと／主体として徴発する (Althusser, 1969, 302-307)。さらにいえば、AIE は資本制生産諸関係のマトリックスともいべき資本主義的な時間－空間性そしてリズムをも再生産しているのである。

留意すべきは、ウォーラーステインそしてエティエンヌ・バリバルが明らかにしたように、資本主義がレイシズムと性差別を中心とするような文化装置をそのシステムに組み込んでいる点である (Balibar and Wallerstein, 17-67)。ウォーラーステインは、資本主義のもとで機能する性差別ならびに人種差別は、近代以前のそれらとは根本的に異なることを強調する。「史的システムとしての資本主義は、以前には全く存在しなかった差別 (oppressive humiliation) のためのイデオロギー装置を発展させた。すなわち今日言うところの性差別と人種差別にかんするイデオロギーの枠組みが成立したのである」 (Wallerstein, 1995a, 102)。資本主義は、人類を搾取と支配の関係において分割し、剰余価値を収奪しうるような差異と落差をたえず再生産しないことには存続することができない。ところが、普遍主義的な近代の理念にあっては人類は形式的には平等とされ、身分的階層は許されるものではない。そこで資本主義が要請したのは、擬制 (fiction) としての社会的諸分割線の導入であった。近代は、擬制として諸個人によって生きられ、ゆえにある程度は可塑的でもある分割線——階級、国境、人種、性差、国民性そして正常性 (=平均性) / 異常性など——を促進、強化してきた。それらは一義的には政治的・文化的な諸敵対を引き起こしたが、同時に搾取のメカニズムに巧妙に組み込まれてもいる。たとえば、ウォーラーステインによれば、人種差別は労働力をエスニック化し、最低限の賃



金と交換される労働力層をつくり出す機能を果たしている。また、資本主義における性差別の主な機能といえば、ジェンダーを（剰余価値を生む）生産的労働と非生産的労働（家事・育児）へと振り分け、後者から社会的労働というステータスと価値を剥奪することにある。それによって資本は、ハウスホールドにおける労働力再生産のコスト負担を免れることができる（Balibar and Wallerstein, 34）。労働力の再生産は膨大な社会的資源と労働のインプットの成果であるにもかかわらず、資本は自らが「取引」しているのは市場で売り買われる商品の一つにすぎないと言えるのである。すなわち、社会的・文化的分割線には、搾取者と被搾取者、生産的労働と非生産的労働の分割が重ね合わされており、不等価交換や搾取を正当化したり隠蔽したりする効果をもつ。ウォーラーステインにあっては、資本主義はジオカルチャー／ジオポリティクス／資本主義世界経済という三つの審級によって重層決定されるシステムとして捉えられる。支配は搾取と複雑な関係を持っており、文化的諸分割線は両者と抜きがたい共犯関係にあるのである。

すなわち、資本主義という世界システムは、資源・技術・科学・生産手段の寡占・独占をつうじて世界中の諸社会が産み出した剰余価値を一部の国家群に集中させながらも、周縁地域には極端な貧困をもたらす経済的システムであるが、他方で経済力によって裏打ちされた軍事・政治諸大国にグローバルな搾取システムの維持・保存を担わせるとともに、それらセンター資本主義諸国に世界の共同管理・共同支配を許す政治的システムでもある。そのうえ、資本と資本主義国家は、近代以前にあった様々な社会的・文化的分割線——身分・階層、境界、差別など——を巧妙に利用し、伝統や起源を捏造することによって近代的分割線へと鑄直し、搾取と支配のシステムに組み込んできた。反システム運動としての「1968年世界革命」が近代世界システムを解明する理論的前進と同時代的に並行して生じたこと、このことはカウンターカルチャーの背景を理解するために確認しておくべきことに思われる。

## 2. サブカルチャーからカウンターカルチャーへ

### 2.1 カルチュラル・スタディーズによる 文化およびヘゲモニー概念の刷新

つぎにサブカルチャーおよびカウンターカルチャー研究にたいするカルチュラル・スタディーズの貢献を検討したい。「諸サブカルチャー」は、文化を自己完結した空間として見なすのではなく、生産諸関係を軸とした社会的諸関係の変化との連関において英国におけるサブカルチャー／カウンターカルチャーの出現を捉えようとしている（以下、サブカルチャーに言及する場合は、ロンドン・イーストエンドに端を発する労働者階級サブカルチャーに限定する）。1950年代後半に始まる英国における生産諸関係の変動は、階級関係の再生産を保障していた物質的諸条件の激変を意味したのであり、諸階級も根底的な変化を余儀なくされた。「諸サブカルチャー」による研究は、劇的に変化しつつあった物質的基盤にたいする諸階級による象徴的かつ想像的な反応としてサブカルチャーそしてカウンターカルチャーを位置づけようとするものである。

その研究を検討する前提として、「諸サブカルチャー」における文化およびヘゲモニーの概念規定を、グラムシならびにアルチュセール理論との関係において捉えてみたい。レイ・アルチュセールは、「イデオロギーは、現実的存在諸条件にたいする諸個人の想像的な関係を表象する」(Althusser, 1969, 296) というテーゼを立てることによって、マルクス主義イデオロギー理論に新たな地平を切り開いた。このテーゼによって、「現実のカバーイメージ」というイデオロギー表象が退けられたのだった。アルチュセールが到達したのは、現実的・物質的な諸条件にたいする個人の関係が必然的に想像的なものにならざるをえないという認識である。この認識は、スピノザ哲学に直接に繋がっている。スピノザは、人間の有限の知は世界の因果関係の総体を汲み尽くすことができないこと、ゆえに人間と世界の関係は想像的なもの(第一種の知)にならざるをえないという認識に達した。のちに、アルチュセールは、イデオロギーという想像的なシステムが人間に不可欠

なものであること、人間は「イデオロギー的動物である」(Althusser, 1994, 70) と主張することになるだろう。この想像的なシステムとは諸個人のふるまいに社会的な意味を与える間主観的・象徴的ネットワークなのであり、諸個人はそのなかで他人によって承認されたアイデンティティをもつ主体として自らを認識（もしくは誤認）しうるのである。

「諸サブカルチャー」の文化概念もアルチュセールのイデオロギー論を踏襲している。すなわち、現実的な諸条件と諸個人との関係が想像的なものであることが強調されるが、しかし、この想像的な関係はイデオロギーというよりも文化と呼ばれるべきとされる。そして文化とは、諸個人の社会的に意味を付与する「意味の諸地図」(the maps of meaning) であること、そしてこの「意味の諸地図」を諸個人が生きることによって、諸個人の社会的存在が可能になり、そして彼らの経験には形式が与えられると主張される (10-11)。この定義にしたがえば、人間は文化的になったり文化的でなくなったりするものではない。文化は人間の存在論的条件ということになる。そして、集団・身分・階級への帰属に応じて、諸個人はそれぞれ異なった文化を生きるのである。こうして社会内には、いくつかの文化が存在しうるのであり、ある文化が他の諸文化を従属させるに至ったとき、当の文化はイデオロギーとなる。イデオロギーとは、諸文化のなかで支配的なポジションにあるそれということになる (12)。

「諸サブカルチャー」が際立った理論的特異性をみせるのは、そのグラムシのヘゲモニー解釈である。そこでは、支配階級によってつねにすでに掌握され、行使されているものという通説的なヘゲモニー解釈が退けられている。そして、ヘゲモニーは、ある特殊な歴史的状況にのみ適応されるべき概念だとされる。つまり、ヘゲモニーが成立するためには特殊な諸条件が要請されるのである。

Gramsci used the term "hegemony" to refer to the moment when a ruling class is able, not only to *coerce* a subordinate class to conform to its interests, but to exert a "hegemony" or "total social authority" over subordinate classes. This involves the exercise of a special kind of power — the power to frame alternatives and contain opportunities, *to win and shape consent*, so that the granting of legitimacy to the

dominant classes appears not only 'spontaneous' but natural and the normal. (...) A hegemonic cultural order tries to *frame* all competing definitions of the world within *its* range. It provides the horizon of thought and action within which conflicts are fought through, appropriated, obscured or contained. (38-9)

ヘゲモニーとは、従属階級からの自発的従属や同意をえることには終わらない。ヘゲモニーが成立している状態とは、抵抗や異議申し立て、敵対や闘争、そしてオルタナティヴとして提示されるものまでもが、権力ブロックの政治的・経済的階級利害の埒内に包摂され、なおかつその包摂が「意識」にすら昇らないことを指す。そこでは、あらゆる社会的なふるまいがヘゲモニーという土俵の上でしか生起しないのであり、当の土俵の限界が刻印されるのである。すなわち、ヘゲモニーとはイデオロギーの全体化ともいえるべき特異な状況であるといえよう。

## 2.2 1950年代英国におけるヘゲモニー

「諸サブカルチャー」によれば、1950年代英国においてはヘゲモニーが成立していた。では、そのヘゲモニーはいかなるものであったのか。「諸サブカルチャー」は、それを「社会学的三位一体」(sociological trinity)として位置づけ、豊かさ・コンセンサス・ブルジョワ化 (affluence, consensus, embourgeoisement) という三つの要素から論じている (17-30)。これら三つは、それぞれ物質的生活水準、政治状況、イデオロギーを表現している。「諸サブカルチャー」は1970年代の視点から論じているのであるが、ここではそれ以降の諸研究を踏まえ、現在の視点から1950年代の政治経済的状况を概観する。それによって、ヘゲモニーの成立諸条件が浮かび上がってくるはずである。そして「諸サブカルチャー」は焦点を当ててはいないが、本論の文脈において重要なことは、1950年代におけるヘゲモニー状況が近代化の完遂としてある種の「歴史の終わり」の如きものとして現れたことである。

当時の世界資本主義システムの状態を概観しておこう。二つの大戦を経

て戦時経済体制ないし総動員体制を契機として、国家による金融システム・市場への介入および国家主導による生産体制の編成・管理を特徴とする生産様式が確立されていった。たとえば、第二次大戦直前の合衆国における兵器の大量生産の確立こそが、互換性部品のアッセンブルによる大量生産という、いわゆるフォーディズム生産システムの完成と普及・浸透を可能にしたのだった。すなわち、準戦時体制における兵器製造を媒介にして、機械機器・電子機器製造を中心とするパクス・アメリカナ資本主義が確立されたのである。

このような資本主義の形態変化は、イギリス資本主義の50年代の相対的安定とその後の没落を用意するものであった。フォーディズム体制（大量生産・高賃金・大量消費）は、経済における「豊かさ」を実現し、経済への国家介入は政治における「コンセンサス」を規定した。「諸サブカルチャー」も指摘していることだが、50年代の経済状況において最も特徴的なのは労働者階級の給与水準の上昇、なかでも若年層の可処分所得の上昇である。これがなければ、そもそも「消費文化」の側面をもつユースカルチャーは成立しえない。また保守党は13年にわたり統治を担うのであり、「戦後コンセンサス」あるいは「コンセンサス・ポリティクス」と呼ばれる統治形態が現れる。ポール・アディスンによれば、それは端的に「政党による違いはあるのか」というフレーズによって象徴される統治形態である。それは、戦時下の挙国一致体制において採用されたベヴァリッジ報告以来の「福祉国家」、そして「混合経済」というスローガンを参照して行われる政治であり、保守党と労働党の政策における実質的差異が見えにくくなった状況である。「保守党と労働党のリーダー達は、混合経済による現実的で実現可能な政策を支持したのだった」(Addison, 14)。それらの政策とは、完全雇用、労働組合との協調、包括的な社会保障、植民地経営からの撤退などであった(Kavanagh and Morris, 6)。労働組合は、闘争・軍事路線よりも体制への参加を選びつつあり(組合闘争のロビー活動化あるいはAIE化)、保守も革新も「人間の顔をした資本主義」と社会民主主義で一致するかのようになされた。

このような政治経済状況から生まれたのが、「ブルジョワ化」というイデ

オロギーである。50年代英国では、現状はともあれ「豊かさ」と「コンセンサス」の進展によって、いつかはすべての国民を包みこみ、その成果を享受できるであろう過程として「ブルジョワ化」が受け入れられた。「ブルジョワ化」の完遂が階級闘争の終わりを意味するならば、それは「歴史の終わり」を画すものであるだろう——マルクスとエンゲルスによれば階級闘争は歴史のモーターなので。ヘゲモニーの最大の効果とは、それが「歴史の終わり」——社会諸関係、価値観、理念をめぐる闘争が終わり、残されているのはもっぱら技術的な調整のみという状態——のごときものとして現れるときである。ところが、この「歴史の終わり」はイデオロギーの全体化の効果にすぎない。じっさい起こっていたのは、階級闘争の終わりなどではなく、国家介入——経済主義的な弥縫策——による階級関係の固定化による相対的安定であったからである。

そもそも資本主義はこのような停滞と相容れるものではない。資本主義は、それが産み出す諸矛盾をみずから解決することができるシステムである。すなわち、不況・好況そして恐慌というサイクルをもつ資本主義は、利潤率の低下という自らの限界を、恐慌時における生産諸関係の暴力的再編と新たに導入される生産諸力によって克服するのである。この過程が、社会に途方もないダイナミズムをもたらすことは想像に難くない。資本主義は、封建制社会における固定的かつ静的な社会秩序を解体し、諸個人を歴史のダイナミズムのなかに叩き込んだのだった。このダイナミズムは、そもそも階級的なアイデンティティすら諸個人に保証するものではない。

しかし1950年代に英国に見られたのは、国家の経済介入による資本のダイナミズムの停滞、そして階級的関係の固定化である。「諸サブカルチャー」が、サブカルチャーの発火点とみなす、ロンドン・イーストエンドは、1880年以來！の労働者階級のコミュニオンを保存していたのだった。「諸サブカルチャー」は、コミュニティという曖昧な観念を用いているが、ここではまだ生産過程と生活過程が混在していた古いタイプの地域コミュニティという岩田弘による定義に従って「コミュニオン」という概念を用いる（岩田、1971、333-334）。コミュニオンの強さは、生産過程と生活過程が明確に分割されておらず、広いハウスホールドが保たれている点にある。イーストエ

ンドの労働者達は職住近接の生を送り、互酬経済が広く浸透していた。さらにファミリービジネスやコーナーストアが健在であり、イーストエンドは小さな独立経済圏を形成しえていた。1950年代の英国においては、諸階級が現状維持のまま温存され、局所的にはコミュニオンも存続しえたのである。階級類型学に依拠している「諸サブカルチャー」の分析が、こと労働者階級サブカルチャーに関しては成功しているように思われるのは、もっぱら対象の側の歴史的特殊性によるといってよい。

### 2.3 ヘゲモニーの亀裂—— パックスブリタニカ資本主義の終焉

1950年代、ヘゲモニックな状況の裏で、イギリス資本主義が大きな変化を余儀なくされていたこともたしかである。1950年代の中期とは、新たな世界商品である機械機器・電気電子機器製造を中心とするフォーディズム大量生産システムが、長期にわたる高度経済成長を支える原動力として確立された時期であった。それは、鉄道と鉄鋼業を中心とする旧植民地主義、すなわち鉄道帝国主義を徹底的に時代遅れにした。すなわち植民地経営は費用対効果に見合わぬ負担をメトロポリスにもたらしたのであり、もっぱら資本の輸出——労働力の搾取と一次原料の確保——に戦略を絞った新植民地主義をとった帝国主義国家だけが高度成長を遂げる。そして、石炭から石油へのエネルギー革命。これらの世界資本主義の形態変化にイギリス資本主義は大きく乗り遅れることとなった。

国際競争の激化とイギリス資本主義の凋落は、英国の階級関係に大変動をもたらすことになる。ロンドン・イーストエンドの労働者階級のコミュニオンとして例外ではない。そのコミュニオンは、資本の浸透と生産諸関係の再編成のなかで解体の危機に見舞われた。大資本による寡占が激化してゆくにつれファミリービジネスの存続は難しくなり、若者達は職をえるためにはコミュニオンを離れなくてはならなくなる。また、学校は、AIEとして親たちとは違う儀礼、価値観、言語、スキルを担う主体として子供達に「呼び

かけ」た。いわゆる実力本位制度（merit system）を通じて選抜された「良き」主体達は、コミュニオンを離れ親たちとは違う世界を生きることになる。社会的上昇には、親の世代の与り知らぬ高度なスキルと専門性が要求されるようになっており、逆に育った場所に留まることはルンペンプロレタリアート化を意味した。さらに、彼らのなわばり意識を保証してきたコミュニオンの記憶を刻みつけた古い町並みは、不動産投機の商品として、また都市再開発の対象として解体されてゆく。搾取システムの再編成のなかで、諸個人は新たな階級関係へと配分されなおされる。階級類型学がもはや単純に適用できないような、複雑かつ動態的な階級分裂が社会を横断してゆくのである。

## 2.4 サブカルチャー——コミュニオンの想像的な回復

「諸サブカルチャー」の読解に戻ろう。「諸サブカルチャー」によれば、サブカルチャーの出現は、現実の物質的諸条件、階級的諸問題にたいする想像的な解決、すなわち失われつつある労働者コミュニシの想像的回復であった。スキンヘッド、モッズ、フリーガニズムなどは、資本と国家によって解体されつつあった労働者コミュニオンを目の当たりにして、労働者階級としての帰属性、「仲間意識」をつくり直そうとする試みであった。そこには、ペアレントカルチャーとの同一性を再確認しようとする傾向が見いだせる。

他方で、サブカルチャーは現実の諸条件にたいする特定の世代による特有の反応を示すとする「諸サブカルチャー」の着目にも留意すべきだろう。ユースカルチャーとしてのサブカルチャーは、労働者階級の親たちが生きている文化（ペアレントカルチャー）の分派である。そのペアレントカルチャーもまた支配的な文化（＝イデオロギー）にたいし従属的な位置にあるが、しかし、相対的な自律性をつくりあげてきたことも事実である。ところが子供達といえ、学校を通じて支配的な文化による儀礼、価値観、欲望、生活様式、言語なども身につけるようになっていく。その反映として、サブカルチャーにはペアレントカルチャーからの自立と差異を強調する傾



向も明瞭に観察できる。

ところで支配的文化の影響とペアレントカルチャーへの帰属というアンビヴァレントな傾向に引き裂かれたサブカルチャーには、支配的文化への屈折した依存も見いだされる。「諸サブカルチャー」は、サブカルチャーの戦略として「外からの調達」(expropriation)ならびに「配置替え」(relocation)を重視している。サブカルチャーは、支配的文化の諸要素そして諸商品を借用し、それらを異なる組み合わせ、異なるコンテクストのうえに再配置するというのである。たとえば、山高帽、ピンストライプスーツ、細巻きの傘というブルジョアジーの「三種の神器」からピンストライプスーツをとりだし、それを真っ赤なソックスや白いスニーカーと合わせるといった具合である。その戦略は、なるほどパロディとして効果——ブルジョアジーのクラシコ・スタイルの戯画——をもちえるかも知れない。しかしながら、それは直接労働者がもはや生産過程を掌握しえず、労働者達が手にしうるのは商品だけであり、さらに文化産業によって諸欲望の条線までもが管理される状況を反映している。つまり、サブカルチャーは、抵抗もまた「新奇的な」商品となりうる状況に規定されている。

「スキンヘッド達は、労働者階級の価値観を再確認するものである」(48)と指摘する「諸サブカルチャー」は、サブカルチャーの反動的な側面をも示唆している。スキンヘッド、モッズ、フリーガニズムには、労働者階級の伝統的価値観、なかでもその負の遺産の強調も見いだせるからである。サブカルチャーが持つなわばり意識(奴らと俺たちの線引き)、男性原理そしてファロセントリスティックな位相に注目するならば、従属階級と見なされてきた労働者階級にもじっさいには複雑な分割線が走っていることが確認されよう。この点において、『諸儀礼を通じての抵抗』にも論文を寄稿しているディック・ヘブディッジが、自著『サブカルチャー、スタイルの意味』(*Subculture, the Meaning of Style*)ではサブカルチャーによる「象徴的抵抗」の主体的・積極的側面を強調し、そのスタイルの意味を「ヘゲモニーへの挑戦」、「秩序への抵抗」(Hebdige, 1979, 17-18)と言い切ったのにたいし、「諸サブカルチャー」はより弁証法的である。

そのうえ、サブカルチャーが、封じ込めの戦略によって「文化」のなか

に孤立・閉塞してしまっていたことも無視できない。「諸サブカルチャー」はこの状況をつぎのように表現している。

There is no 'subcultural solution' to working-class youth unemployment, educational disadvantage, compulsory miseducation, dead-end jobs, the routinisation and specialization of labor, low pay and the loss of skills. Sub-cultural strategies cannot match, meet or answer the structuring dimensions emerging in this period for the class as a whole. So, when the post-war sub-cultures address the problematics of their class experience, they often do so in ways which reproduce the gaps and discrepancies between real negotiations and symbolically displaced 'resolutions'. They 'solve', but in an imaginary way, problems which at the concrete material level remain unresolved. (47-48)

サブカルチャーは、現実的諸条件、物質的諸矛盾にたいするあくまで想像的な解決でしかない。それは文化における象徴的な抵抗が無意味だということではない。しかしながら、それは現実的な社会的諸条件についての認識を与えてくれる諸科学、およびそれに基づいた諸実践と節合されない限り、「具体的で、物質的なレベルにおける諸問題」にとどかないのも確かである。

「諸サブカルチャー」による分析を補足するならば、サブカルチャーには、システムの再生産に寄与してしまう何か「積極的な」側面があるのではないか。たとえば「モッズは、終わらない週末と退屈で見通しの暗い仕事が始まる月曜日のあいだのギャップを隠蔽する」(48)という分析は注目に値する。この分析は、余暇／労働時間の分割が資本制生産諸関係の要であるという認識とつき合わせてみるべきだろう。余暇／労働時間という区別は、歴史的に見て決して自明なものではない。諸個人がこの二分法を自明なものとして生きるようになるまでには、資本は身体を規律する微細な権力を絶え間なく行使し、計算・蓄積可能な時間性、アイデンティティがそれによって確認されるところの碁盤の目状に分割された空間性、さらには資本のサイクルに準拠すべく生産し消費するリズムと欲望とを、諸個人の身体に刻み込んでこなければならなかった。そのなかで余暇は、消費の過程として、

さらに労働力商品の再生産の過程として、開発＝搾取され（exploit）管理されてきた。「諸サブカルチャー」の分析から一歩踏み込めば、サブカルチャーは、資本制生産諸関係のマトリックスというべき歴史特殊的な時間－空間性ならびにリズムの再生産という機能を担っていたといえよう。サブカルチャーは文化 AIE として機能していたかもしれないのである。サブカルチャーの戦略にはあきらかなデッドエンドがあった。それは近代が強化してきた抑圧、差別、封じ込めそして排除を可能にしてきた諸分割線を前提にし、ときには依拠してしまうことによって、それらの再生産に荷担してしまっていたからである。

## 2.5 カウンターカルチャー——ポスト近代の基盤の出現

ところでサブカルチャー運動のなかで、60年代を通じてある特異な特徴をもった運動——カウンターカルチャー——が立ち現れてきた。カウンターカルチャーを、ヒッピームーヴメントとして、「ドラッグ、ドロップアウト、ゲイのサブカルチャー」として片づける向きもある。しかし、そこからジェンダーポリティクスが立ち上がったように、カウンターカルチャーは単なる「文化的な」運動ではない。カウンターカルチャーは、ヘゲモニーの亀裂に続いて、近代世界システムを揚棄しようとする運動の一環として現れたのである。

「諸サブカルチャー」によるカウンターカルチャーの分析を辿っておきたい。そのカウンターカルチャーへの評価はここでも両義的である。カウンターカルチャーもまた、ヘゲモニーの亀裂にたいする一つの想像的な反応、しかし今度は「中産階級」によるそれであることが指摘される。すなわち、プロテスタント資本主義から後期資本主義（＝消費社会）への移行局面にたいする「中産階級」による文化的な反応と見なされるのである。カウンターカルチャーの「容認（甘やかし）革命」（permissive revolution）は、プロテスタンティズムの禁欲的エートスを時代遅れのものとし、来るべき消費社会・高度情報化社会にむけて諸個人の情動を再組織し、欲望の条線

を規定するものであった(65-66)。消費社会のイデオロギーとして、カウンターカルチャーが資本による新たな包摂の露払いを担ったことは否定できない。ただし、このようなカウンターカルチャー評価は、消費社会のイデオロギー分析として有効性を持つとしても、その階級類型学的なアプローチは歴史的限界を印してもいる。サブカルチャー＝労働者階級／カウンターカルチャー＝中産階級という図式はもはや有効な参照枠足りえないだろう——さらにいえば、「中産階級」はその曖昧さゆえに到底科学的概念とはいえない。

他方で、カウンターカルチャーは、ペアレントカルチャーおよび支配的文化にたいする全面的な批判、転覆を孕むものでもあった。このことは、カウンターカルチャーが単なる「サブ」カルチャーに還元できない位相を持っていたこと、ペアレントカルチャー／サブカルチャーという対を逸脱するようなモメントをもっていたことを意味する。「諸サブカルチャー」もまた、家族、教育、メディア、結婚、性差による分業など支配的な文化的・イデオロギー的關係にたいする反抗としてカウンターカルチャーを位置づけてはいる。しかしながら、「カウンターカルチャーは、外見上は反政治的であったときでさえも、その客観的な傾向は、潜在的に政治的であった」(61)という認識を得ていたとしても、その政治性を「諸サブカルチャー」の分析が明らかにしたとはいえない。ここからは、「諸サブカルチャー」を離れて、カウンターカルチャーの歴史的意味を探ってみたい。

カウンターカルチャーは、一義的には「文化的な」抵抗であったかも知れないが、それは文化の止揚を目論む限りのものであって、ヘゲモニーの亀裂を契機としてオルタナティヴな社会を目指すという点において優れて政治的運動であった。そしてそれは「先進」資本主義諸国に限っていえば世界同時多発的なものであった。すなわち、60年代におけるヘゲモニーの解体は一国に特殊な事件ではなかった。ベトナム戦争の泥沼化による覇権国合衆国の躓き、67年のポンド危機、68年の国際金プール制の危機による国際金本位制の崩壊——それは71年ニクソン声明による公式的宣言に先んずるドル金決済の事実上の停止を意味した——、これらは明らかに資本主義の危機を意味していた。そして資本主義の危機に反応した諸闘争は国

境を越えた共振性を見せたのである。それだけではない。1960年代、抵抗と蜂起は新たな視圏と新たな形態をとって現れたのである。たとえば、家父長制、ジェンダー、ネーション、国境、人種、帝国主義、前衛党、新・旧植民地主義——これらがつぎつぎに自明性を剥奪され、様々なかたちで搾取や抑圧、差別や封じ込めを被っている人々の抵抗と蜂起を促したのだった。そして世界的なニューレフト運動の勃興。その転機点は、1956年フルシチョフがスターリンについての秘密報告を行ったソ連共産党第20回大会かもしれない。スターリンへの「個人崇拜」の暴露とそれに続くハンガリー事件は、ソ連共産党のみならず歴史の諸法則を掌握しているとされた各国前衛党の権威を失墜させ、知識人による大衆の先導を疑うに十分なものであった。そこで新たな闘争形態、新たな組織原理が模索され発明されねばならなかった。そしてついに見出されたのが、「器官なき身体」（ドゥルーズ＝ガタリ）とも呼ばれうる中心なき運動体である。国家を模倣した中央集権的組織は否定され、運動体はそれら自身が自律性を持った無数の運動による出会いと節合そしてせめぎ合いの場となった。岩田弘はその組織原理を「反乱による反乱の組織」と表現した。抵抗運動の革命的形態が世界各地で生じたのである。ベトナム反戦運動は、世界的な規模でアソシエートされたマルチチュードの到来を告げるものだった。反戦運動は、合衆国では黒人の公民権をめぐる蜂起とも結びついた。1968年にはフランスで一千万人規模の労働者のストライキと学生反乱の出会いが起こりかけ（5月革命）、1969年イタリアでは「熱い秋」とよばれる労働者による工場占拠・自主管理闘争が繰り広げられた。

革命的理論に裏付けられた新たな形態を有する運動は、労働者階級サブカルチャーが再生産した労働時間と余暇との二分法のみならず、資本と資本主義国家が巧妙に開発・組織し、社会に張り巡らせてきた近代的な分割線や欲望の条線、それらを支えてきた価値と諸制度——家族、学校、労働——を疑い、揺さぶりをかけたのだった。理論はAIEの存在を明らかにし（アルチュセール）、そして文化的・政治的な抵抗は、諸AIEをその闘争の主要な賭金とした。オルタナティヴな教育、オルタナティヴな家族、オルタナティヴなジェンダーの関係、オルタナティヴな協業のあり方が追求された。

なるほど、それらはマイクロな闘争の追求という位相を持っているかに見え、シニカルなポストモダニストならば「大きな物語の終わり」の端緒を見出したくもなるかもしれない。しかし、そのような向きは、反システム闘争が、当のシステムの再生産を保障している諸制度・イデオロギーをめぐる闘われる他ないという事実を捨象してしまっている。反システム闘争は、機動戦というよりも陣地戦（グラムシ）という形態をとる——ただしその主戦場は、「市民社会」ではなくてグローバル市場ならびにインターステート・システム、そしてそれらがつくり出した社会的・文化的諸分割線であるが。

1960年代、新たな形態をもった社会的闘争の基盤が確立された。この意味において、1968年という年を現在も進行中の世界革命——グローバルな反システム運動——のターニングポイントとしてとらえる、ウォーラーステインや絳の視点は肯定できるものがある。さらにカウンターカルチャーとそれに続くコミューン運動が、国家と原子的個人、個人主義と集団主義という近代的対立をこえ、新たな個人性と共同性を追求するものであったことも強調されてよい。カウンターカルチャーは、コミューン運動と緊密な並行性を保っていた。カウンターカルチャーがニューレフト的なものと繋がる政治性を持ち、さらに資本制生産の止揚を計るものであるならば、ハウスホールドをゆるやかに拡大し、生産過程と生活過程とが不可分である生の様式——コミューン——を追求するのは当然のなりゆきであろう。さらに、そのコミューンは、労働者階級サブカルチャーが想像的に回復しようとした近代的コミューンのもつ抑圧的側面への批判を受けとめてもいた。すなわち、コミューン運動は、性的分業、生産的労働と非生産的労働、余暇と労働などの分割を疑い、資本主義的な時間-空間性とリズムからの解放、そして精神労働と肉体労働の分業の揚棄を模索した。それらは近代世界システムにたいするオルタナティブな“milieu”を目指すものであった。

それらのコミューン運動のなかには現在にいたるまで存続しているものも多々ある。しかしながら、資本主義の「セーフティガード」として機能している側面はあるとしても、それらが目指したオルタナティブな社会の実現にはいたってはいない。またコミューン運動は、反システム闘争ではなく、社会からの「エクソダスへの逃避」に陥ったとたん危ういものとなっ

た。孤立閉塞してしまったコミュニン・セクトは、政治的傾向が強ければ強いほど、メンバーに同質的なアイデンティティとファナティックな忠誠を強制し（リンチ）、外部他者にたいして不寛容な攻撃性（内ゲバ・テロリズム）をふるうまでになった。

『諸儀礼を通じての抵抗』には、「諸コミュニン」と題されたコリン・ウェブスターによるコミュニン研究が収録されているが、そこではコミュニン運動が当初から合理主義と非合理主義に引き裂かれていたことが指摘されている（Webster, 133）。神秘主義、カルト的終末論、オカルトなどは、コミュニン運動がついにぬぐい去ることのできなかった悪魔的側面であろう。反システム闘争として始まった諸闘争の幾つかが内ゲバ、リンチ、テロリズムで終わった事実をたいし、われわれはいかに対応すべきなのか。近代世界システムの揚棄は開けてはいけないパンドラの函であり、抵抗や異議申し立ては、既存の枠組みを尊重した修正主義的な条件・権利闘争にとどまるべきなのか。5月革命直前に『ウイークエンド』（*Week End*, 1967）を撮ったジャン＝リュック・ゴダールは、メレイユ・ダルクに現代の地獄巡りをさせている。彼女は、死体も散見される延々と続く渋滞という「ポップ」な地獄絵をかいくぐったと思えば、今度は戦闘的なアナーキスト・コミュニンに囚われ、殺された夫の肉を喰らう羽目になる。システムのこちら側も地獄、あちら側も地獄というわけである。われわれはしばらくの間はゴダールが到達した過酷な認識を耐え抜かねばならないだろう。

## おわりに

1970年代後半には世界は反革命に飲み込まれてゆく。様々な抵抗運動が行き詰まったあげくに、テロリズム、内ゲバ、リンチを繰り返し、急速に大衆の支持を失っていったことも確かである。しかし、それを自暴自棄的な自滅と見るのは公平さを欠く。そこにいたるまでには資本と資本主義国家によるなりふり構わぬ弾圧、封じ込め、懐柔、脅し、法を逸脱した介入などがあったことを忘れるべきではない。資本主義国家は、いざとなれば

「法治国家」の看板などかなぐり捨てて人々をはっきりと目撃したはずなのだ。しかし、経済的には妥協を強いられながらも資本と国家はさしあたり抵抗と蜂起の弾圧に成功した。そこから、あからさまな暴力と脅しをちらつかせつつ権威主義的伝統とポピュリスト的ナショナリズムに訴える政治（ニューライト・新保守主義）が成功をおさめていく。ホール達も1980年代はサッチャリズムとの理論的対決を余儀なくされたのだった。なるほど資本主義はその最大の危機を乗り越えたかに見え、1990年代初頭には「市場経済と自由主義の勝利」というスローガンのもとで歴史の終わり——すなわち世界システムをめぐる闘争の最終決着——が喧伝されたのだった。このような歴史的推移が1970年代から続く世界的な反革命の諸帰結であることは思い出されてよい。左翼運動、労働運動、学生運動の衰退は単に一国に限られた現象ではなかった。そして文化における諸運動は、商業化による急速な陳腐化から逃れる術をもたなかった。

さてカウンターカルチャーならびにそれと軌を一にした諸運動が、なぜゆえ執拗なまでに国家による暴力と抑圧、資本による懐柔と包摂を誘発したかについてはすでに論じたとおりである。それらが資本と資本主義国家を主要な担い手とする近代世界システムにたいする、グローバルかつラディカルな抵抗であったからである。ところがカウンターカルチャー的なものは、近代的な時間-空間性そして近代的な生の様式を揺さぶるようなもの——すなわち近代の限界に迫ろうとする冒険——でもあったので、それ自体に根源的な危うさを孕んでもいた。たとえば、マックス・ウェーバーを参照しながらユルゲン・ハーバーマスは、近代的文化が認識的・道具的、道徳的・実践的、美的・表現的という三つの領域に分化し、それぞれが相対的自律性を持つにいたった、と述べている。ハーバーマスによれば、近代化とは近代文化が科学・道徳・芸術（真・善・美）への三分化してゆく過程に他ならない。そのうえでハーバーマスは、三分化の帰結としてのそれぞれの自足的閉塞を突破しようとする試みのなかで、それらのうちのどれか一つだけを開放し、すべてをその一つに繋げ止めようとすることの無理を指摘している。その行き着く先は政治の美学化によるテロリズムもしくは道徳的リゴリズム（原理主義）とするハーバーマスの指摘は重く受け



取られるべきだろう (Habermas, 25-40)。カウンターカルチャー的なものが、文化の三分化と自足的閉塞にたいするアンチテーゼとして現れたことは繰り返すまでもない。そしてまたハーバーマスの指摘した陥穽から逃れられたとも言い難いのである。

ところで「歴史の終わり」の唱道とは裏腹に、われわれは近代世界システムの動乱期に入りつつあるように見える。われわれが生きている世界システムが、「自由主義と市場経済」というようなヘゲモニーではなく、あからさまな暴力によって支えられていることはもはや明らかである。それは今後もグローバルな規模での抵抗と蜂起とを引き起こさずにはいないだろう。そしてカウンターカルチャーへの評価は別にしても、それはさまざまな形態をとりつつ繰り返し出現するに違いない。カウンターカルチャーの経験は一つの示唆をわれわれに残したように思われる。今後カウンターカルチャー的なものが再出現するにしても、それが単なる「文化」現象として現れるとは考えにくいこと、さまざまな形態を取った抵抗運動が領域を越えて出会ったとき、それはわれわれに新たな生の形態を許す“milieu”として現れるだろうということ、である。

## 註

本論は、2004.6.27に行われたカルチュラル・スタディーズ・フォーラム例会における同題の報告に加筆・修正したものである。なお、その際、九谷浩之氏が合衆国のサブカルチャー研究を報告しており、その論考が本号に収録されている。併せて参照頂きたい。

<sup>1</sup> John Clark, Stuart Hall, Tony Jefferson, Brian Robert. "Subcultures, cultures and class." *Resistance through Rituals: Youth Subcultures in Post-war Britain.*, edited by Stuart Hall and Tony Jefferson. London: Hutchinson, 1976, pp. 9-74. 以下、本書からの引用はページ数のみを示す。

## Works Cited

- 岩田弘 1964 『世界資本主義』、未来社。
- 岩田弘 1971 『現代国家と革命』、現代評論社。
- 岩田弘 1989 『現代社会主義と世界資本主義——共同体・国家・資本主義』、批評社。
- 桂秀実 『革命的な、あまりに革命的な——「1968年の革命」史論』、作品社、2003年。
- Arrighi, Giovanni, Terence K Hopkins and Immanuel Wallerstein. *Antisystemic Movements*. London: Verso, 1989.
- Addison, Paul. *The Road to 1945: British Politics and the Second World War*. London: Jonathan Cape, 1975.
- Althusser, Louis 1969. "Idéologie et appareils idéologiques d'Etat." *Sur la reproduction*. Paris: PUF, 1995.
- Althusser, Louis 1994. *Sur la philosophie*. Paris: Gallimard.
- Balibar, Etienne and Immanuel Wallerstein. *Race, Nation, Class: Ambiguous Identities*. New York: Norton, 1992.
- Clark, John and Stuart Hall, Tony Jefferson Brian Robart. "Subcultures, cultures and class." *Resistance through Rituals: Youth Subcultures in Post-war Britain*, edited by Hall, Stuart and Tony Jefferson. London: Hutchinson, 1976, pp. 9-74.
- Foucault, Michel. *Surveiller et punir: naissance de la prison*. Paris: Gallimard, 1975.
- Habermas, Jürgen. "Die Moderne — ein unvollendetes Projekt." *Kleine politische Schriften I - IV*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1981. (ユルゲン・ハーバーマス「近代——未完のプロジェクト」、『近代——未完のプロジェクト』、三島憲一編訳、岩波書店、2000年。頁付けは邦訳による。)
- Hardt, Michael and Antonio Negri. *Empire*. Cambridge: Harvard University Press, 2000.
- Hebdige, Dick. 1981 *Subculture, the Meaning of Style*. London: Routledge.
- Hebdige, Dick. 1989 *Hiding in the Light: On Images and Things*. London: Routledge.
- Kavanagh, Dennis and Peter Morris, *Consensus Politics: From Attlee to Major*. London: Blackwell, 1994.
- Wallerstein, Immanuel. 1995a. *Historical Capitalism with Capitalist Civilization*. London: Verso.
- Wallerstein, Immanuel. 1995b. *After Liberalism*. New York: New Press.
- Webster, Colin. "Communes: A Thematic Typology." *Resistance through Rituals: Youth Subcultures in Post-war Britain.*, edited by Hall, Stuart and Tony Jefferson. London: Hutchinson, 1976, pp. 127-134.